
霧の摩周湖

赤影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の摩周湖

【Zマーク】

Z8993C

【作者名】

赤影

【あらすじ】

僕は「霧の摩周湖」を絶叫して歌っている。会社の近くの小さなスナックだ。「亞紀ちゃんも歌つてよ!」「何がいいかなー」「なんでもいいから歌つて」亞紀が選曲した曲が流れた。ショートカットに憂いのある瞳だつた。歌は悲しく聞こえた。「ママこの店気に入つたから又きますね!亞紀ちゃんよつねー!」これが亞紀との出会いだった。

北海道へ

僕は「霧の摩周湖」を絶叫して歌つていて、会社の近くの小さなスナックだ。

「亜紀ちゃんも歌つてよ！」

「何がいいかなー」

「なんでもいいから歌つて」

亜紀が選曲した曲が流れた。

ショートカットに憂いのある瞳だった。

歌は悲しく聞こえた。

「ママこの店気に入つたから又きますねー。亜紀けんさんよつなりー。」

これが亜紀との出会いだった。

この店に通いだしてから、1年ほどたつた。

明日から遊びゴルデンウイークと言つて。

「亜紀！」

「うんー、ママすこし遅れるらしいのー。」

「明日から連休だねー！どつか行くのー。」

「どこも行くところないもんー。」

「新ちゃんはー。」

「いい人でもいれば連れでどこかへ行つてもいいけど、一人ではね

！」

「あたし連れて行つて！」

「いいよー・・・心にも無いこと言わないでー。」

「本当よー！新ちゃんならいいよー。」

「それってー！御泊りもいってことー。」

「新ちゃんー！いやらしここと考えているー。」

「えーばれたかー！」

「一人だけの店で、ヘネシーの水割りで乾杯した。

「実はね！」

「えー何々！」

「私には腹違いの弟がいるの…」

「へー！」

「小さい頃、私の父はトラックの長距離の運転手で、私の母と離婚した後に来た奥さんに男が生まれたの…」

「そりなんだ！」

「でも、その女の人も家を出で行つたの！その男を残して…」「じゃ一人になったの！でも亜紀も小さかつたんでしよう。」

「あたしは小学校5年生かな！」

「どうしたの！」

「3歳だった弟、あたしが育てたの…」

「へー小学校5年生で…」

「そう！お父さんがお金入れてくれなくて、電気が止まつてひづりで夜を過ごしたこともあつたわ」

「亜紀苦労したんだね、水割りもう一杯作つて…」

「はい！」

「それでどうしたの…」

「中1の時、弟が5歳どうしても育てられなくなつて」「どうしたの！」

「母親が北海道の留萌に住んでいて、父親とトラックで…・・・」

「亜紀はもう涙が止まらなくなつていた。」

「苦しかつたら、言わなくていいよ！』

「いいの！新ちゃんに聞いてほしいの…」

「誰もお客様さん来ないし、ぼちぼちでいいよ…」

「留萌まで弟を、母親に渡しに行つたの…」

「そう！離れたくなかったでしょ！」

「もちろんよ…」

又亜紀の瞳から涙が溢れた。

「……………」めんねー新ちゃんお姫さんなのに。」「

「お姫さんなんて思つてこないよー亜紀もそつだつたり話す氣にならないでしょー」「

「うふー！」

「そうして、どうしたの」

「留萌の駅で弟を母親に手渡したけど、…………弟はあたしの名前をずーと呼んでいたわ！」

「2年も一緒に生活したが、彼には亜紀が母親だよなー」

「その弟が今年の4月に高校を卒業したらじこのーかして札幌に就職したらじいのー！」

「そりなんだー！」

「風の噂だけどー！」

すこし沈黙の時間が流れた！

「亜紀！ 北海道行こう！ 行こー！」

「どうやつて、もうチケット取れないでしょー」「

「車で行こう！ 交代で運転して、青森からならフリーハイウェーに乗れると思つ。」

「余れるか解らないけどーとにかく北海道に行つてみようー」「……………」

「行こうー店は1時で終わりだねー！ それから走ろうー」「

「本当にー。」

「本当だよー休みは1週間あるし、店はその間2日休めばいいー。」「

「行こうかー。」

「行こうー今9時だから僕これから帰つて少し休むから、亜紀のところは2時でいいかなー！ 亜紀田が腫れていますよ、ママ来たら驚くから気をつけてー！ じゅー！」「

僕は亜紀のアパートの住所を聞き、すこし浮き浮きして店を後にした。

愛車のキヤデラックSTSを満タンにしてオイルを交換し、足回りを点検し亜紀のアパートへ行つた。

亜紀はバック一つ持ち、アパートの前で待つていた。

「新ちゃん！」

亜紀の顔は店での泣き顔から、晴れ晴れした顔に変わっていた。

「さー出発！亜紀は疲れているでしょう、眠つていいからね、シートはそここのレバーだから」

「解つた！」

金沢西インターを登つたのは3時少し手前だった。

「新ちゃん安全運転でね！」

「大事な人乗せているのに、勿論です。」

「眠くなつたら、言つてね」

「解つたよ！」

僕は自然と亜紀の手を握つた。亜紀は微笑み返して直ぐに眠つてしまつた。

CDからは、ビリバンバンの焼酎のCMに変わつた、音を少し落としルームミーラを亜紀の寝顔に合わせ、140kmくらいでオートドライブに設定して走り続けた。

亜紀が弟と会つた顔を想像して、自然と顔をほころんだ。

新潟中条で高速を下りて、国道7号戻を北上した。

村上市に入り、喉が渴いたのでコンビニに入り棚を見ていると、

「新ちゃん！」

「おきたのか！何か飲む！」

「これ買って！」

「びっくりしたな！もう！」

「びっくりさせようと思つたんだもん！」

とケラケラ亜紀は笑つた。それがとても可愛く見えた。

亜紀に運転を代わつて時間を見ると7時、青森は遠いと感じる。亜紀に外車は日本車と方向指示器のレバー反対だからねと言つたのに、直ぐにコンビニから国道に出る時に間違えていきなり笑いこけた。

サザンをボリューム最大にして、一人で歌いながら走つた。周りは完全に明るくなつた。

僕は弟に会つために、整理をしようと考え、亜紀に現在分かっていることを質問した。

- 1、留萌に母親がいた。
 - 2、弟は今年高校を卒業した。
 - 3、母親の名前
 - 4、弟の名前
 - 5、留萌に祖母がいた。
 - 6、弟は現在札幌にいる。
 - 7、母親の年齢
- 解つたことはこれだけ、これで探しだせるだらうか…と不安になる。「亜紀！これだけ解れば充分だよ」と心にも無いことを言つた。
- 「目的は留萌だ！GO！」
- 亜紀は明るく言った。

青森に着いたのは14時、フェリーの順番を待つ車の多いこと！チケットは確保したが、係りの人には夕方になると言われた。僕達は車の中で爆睡した。

係りの人にボルネットを叩かれ、やつとのことで起きてフェリーに車を乗せた。

津軽半島の点々とした、淡い光を甲板から眺めながら、

「新ちやんじめんね！」

「何故…」

「こんなことしつき合わせて、連休台無しだね…」

「何言つてゐる、僕は楽しんでいるよ…衆と会つたら摩周湖に行こう…富良野も行きたいし…」

「うん…」

「だから、そんなこと言わないで、僕も楽しんでこるのでだから、家にいても寝てるだけだつたんだから」

「解つた！ ありがと…」

亜紀は弟のことを思つてこるのでさういふ、不安そつだつた。

函館に着いたのは21時だった。

ドキドキしながら、

「どこか泊まる！」

「いいよー！」

しかしモーテルは何処も満員だった。

明日の札幌のホテルに予約して、僕達は札幌へ向かつて走った。

疲れきっていた僕らは、1時間交代で運転したが、時々眠くて車を路肩に止めながら札幌に着いたのは11時だった。

チックインには早かつたが、ホテルに頬み込みシャワーをして、爆

睡！

目が覚めると、もう外は暗くなっていた。

亜紀はまだ眠っている！

時計を見ると19時、お腹が空いたと思つてネオンのビル街を呆然と眺めていた。

「起きているのー！」

「目が覚めたー！」

「うんー！」

その時ドキとした。亜紀は素肌で寝ていたのだ！
ツインベットで分からなかつた。

平常心を装つて、

「亜紀！お腹空かないー！」

「空いたー！」

「何か食べに行こつかー！」

「口うちー見ないでー！」

「うんー！」と言いながら、机の上の鏡に映る亜紀の思つたより肉好

きのいい腰のあたりを見ていた。

白の下着を着ける亜紀を見て、着痩せするのだと思った。

ホテルの外に出ると、自然と亜紀は手を組んできた。

「この街に亜紀の弟がいるんだね！」

「逢いたいな！」

「きつと逢えるさーとにかく腹が減つては戦はできぬだ！何食べる

！」

「なんでもいいよ！」

「魚かなーやっぱり！」

「そうね！」

「あの地下に行こうか！何軒食べ物やありそつやー！」

「ここへ入るづー！」

その店はカウンターだけの10名位座れる小さな店だった。

北海道らしい「北の海」と言つ名の店のカウンターの中には、夫婦と思われる二人が入っていた。

「いらっしゃい！」奥さんと思われる女性の人は明るく行つたが、男の人は何も言わず、チラツとこちらを一度見ただけで、客もいないのに魚を捌いていた。

「亜紀！生でいい！」

「うん！」

「中二つください！」

「はい！」女性は明るく返事をした。

メニューを手に取り、

「刺身何か！美味しいありますか！」と男の人に尋ねると、女性の

人が

「大間のマグロと同じように取れた、マグロありますガ！」

「それください！それとホッケ焼いてください！後はおまかせでー！」

「札幌の人でないでしょ！…ビ」から来たの…」

「金沢です。」

その時、主人の顔が少し変わった。

「そうですか！私達も実は金沢ですよ…」

初めて主人が声を出した。

「何でも喋るな！お客さんに失礼だ。」

「何が失礼よ！いいじゃしない！ね！」

僕達は思わずうなずいた。

「それで、加賀のお酒置いてあるのですね！菊姫、加賀鳶など…」

「そうです！」主人は初めて僕に対して話してくれた。

「お酒は飲れますか！」

「僕は大好きです。」

「じゃーおごりです。」

「ありがとう！」

亜紀に向かつて、主人は

「お嬢さんも飲みますか！」

「はい！」

「これは菊姫大吟醸です。」

「えーこの酒高くなかった。」と亜紀は言った。

「そうだね、1万くらいじゃない！」

「一緒に飲みましょうよ…」

「私はもう飲んでます。」

女の人は明るく答え、そして色々なことを聞いてくる。

歳は！夫婦か！旅行！質問攻めにあつ。

「お前喋りすぎだぞ！」

関係を聞かれた時に亜紀は「恋人ですと答えた。」僕は何故か嬉しかった。

僕達は素直に色々な話をした。

生き別れの弟の事を亜紀が話すと、女人は涙を流して聞いてくれた。

「会えるといいね！」

それからお客が何人か入つてきたので、僕達は店を出た。

さー明日は留萌だ！

留萌

古びた留萌の駅は、高倉健が出てくる映画の世界だった。
舗装もしていない駅の駐車場に車を止めた。

「此處で弟をお母さんに渡したの！」

「どっちの方向に見送ったの…」

亜紀が指を指した。

「一軒ずつ聞こひつー…」

「すみません！美奈子さんのお宅ではありますか…金沢にお嫁に行つていた方ですが！

20軒ほど回った時、「那人なら、吉田さんのとこでないかなー、此処から5件目のお家を右にまわって3件目ですよ…」

「ありがとうございます。」

「すみません！すみません！」めんぐだわいー…」
家の奥から老婆が出てきた。

「美奈子さんのお宅です！」

「美奈子は嫁に行つたが…」

「美奈子さんは、石川の金沢にお嫁に行つたことありますか…」

「ああー」

「男の子が一人いますか…」

「ああー」

「その男子の住んでいるところ知りませんか…」

「私は年寄りで解らないが、札幌でないか！」

「では美奈子さんは何処にお嫁にいったのですか…」

「豊富といつとこだ！」

「名前は…」

「吉田だ。」

「ありがとうございます。」

僕達は豊富に向かった。

豊富は留萌から稚内に向かつて150K、サロベツ原野の中にある小さな温泉町だ。

「色んな事がわかつたからもうダイジョブ亞紀ー！」

「そうね！」「

「弟は札幌にいるんだよ！母親に住所を聞けば元壁だー！」

僕は少し興奮して言った。

亞紀も嬉しそうにうなづいた。

日本海に沿つて真っ直ぐな道が走つている。

何も遮るもののが無く、右は原野、左は日本海だ。

暫らく走ると利尻富士が、海に浮いて見えてきた。

「亞紀！綺麗だね！」

「うん！」

言葉も失つてその景色を堪能しながら走つた。

豊富温泉に着いたのは夕方だった。

「亞紀ー！今日はここに泊まり明日探そー！」

「解つた！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8993c/>

霧の摩周湖

2010年10月11日11時47分発行